

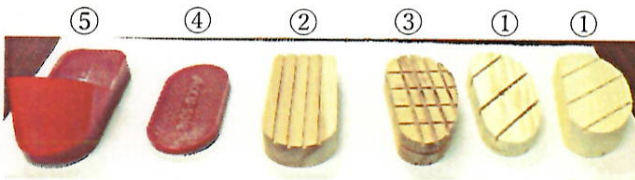
【蹄病治療用具の紹介と蹄病管理についての個人的見解】

はじめに

蹄病治療で使う様々な用具も、新たな物が開発されています。新しい物が好きな私はいくつか試させてもらいながら、より良い治療へつなげられるように奮闘中です。今回はその中で、いくつか紹介したいと思います。

ブロック

これまで我々が使用していたブロックの他に、より硬い木でできたブロック、より大きな木のブロック、そしてプラスチック製のブロックも2種類使用しています。それぞれの特徴を紹介します。

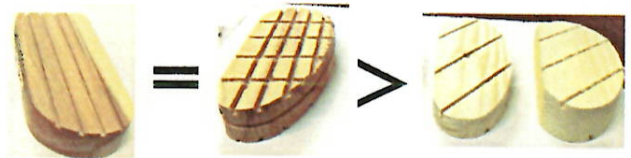


- ① 従来の木ブロック：THMS でよく使うブロックです。木の高さが異なる2種類を使い分けています。軽い病変では薄いブロックを、しっかりと高さをつけたいときには厚いブロックを使用するようにしています。このブロックは比較的、柔らかい木なので、牛の歩行距離が長いとすぐに削れてなくなってしまふことがあります。
- ② 硬い木のブロック：①よりも硬い木で作られており、さらにやや大きいブロックになっています。硬い木なので①より削れにくく、長い間ブロックとして機能します。
- ③ BOND365 専用ブロック：このブロックはBOND365 という蹄とブロックを接着するボンドとセットになっている物です。硬い木で作られており、面積も広がっています。ブロックの面積が広い方が牛の体重を分散できるので歩きやすくなりますが、ブロックが取れてしまう可能性もやや高くなります。BOND365 は接着力が非常に高い接着剤なので、大きいブロックと組み合わせても外れる心配は少ないです。
- ④ Accu-sole：プラスチック製の薄いブロックです。硬く削れにくいので、歩行によって減る心配はありません。本来はこのブロックを積極的に使用したいのですが、糞尿と混じってスラリータンクへ入ってしまうと糞尿を吸い上げるスクリューを傷つけてしまう危険があるので、ほとんど使用できていません。

- ⑤ Accu-block：Accu-sole と同じ素材の厚いブロックです。私は、ひどい蹄病のときに2、3回使用しましたが、よく接着し、歩行も良く、非常に良いブロックだと思いました。このブロックを使用するときには、蹄病が落ち着いたところで再診し、ブロックを外す必要があります。そして、もし外れたときには農家さんに回収してもらいたいです。

それぞれのブロックには特徴があり、どれが一番良いかということではないと考えています。どのブロックを使用することが、その蹄病、その牛にとってより良い結果になるのかを常に考えながら使用するようにしています。

*木の硬さ（感覚的に）



*岩澤は①～⑤まで持ち歩いています。獣医によって持っているブロックの種類が違います。①は全員が持ち歩いています。

接着剤

蹄とブロックを接着するための接着剤もいくつか種類があるので紹介します。THMS では3種類のボンドを使用しています。

- ① アクリル接着剤：THMS で最もよく使う接着剤です。青と白の二種類を混合し、タイミングを見計らって接着します。接着のタイミングにはやや慣れが必要です。



Total Herd Management Service

- ② Accu-Bond: 牛の蹄専用のボンドです。アプリケーターという専用の器具で押し出して使用します。押し出されると、2種類の接着剤が先端のチップで混合されて出てきます。混合されて出てきたボンドはそのまますぐに接着出来ます。非常に簡便で、Accu-sole や Accu-block との相性が特に良いと思います。



- ③ BOND365: 牛の蹄専用のボンドです。ブロックとボンドがセットになっています。接着力は3つの中で最も高い製品ですが、やや高価です。



* 接着力の強さ



(しかし、接着力は技術的な部分が大きい)

* ②の Accu-bond は岩澤のみ、③の BOND365 は岩澤と滝本（旧姓松下）が持ち歩いています。

護蹄管理

なぜ、今回このように蹄病で使用する器具を紹介したのかというと、もっと農家さん自身で蹄病の処置をした方が良いのではないかと思っているからです。農場で蹄病をみる利点としては

- ① コストが安くなる

- ② 対応が早くなる

- ③ 蹄への理解が深まり、蹄から見た牛群管理へつながる

コストについては言うまでもなく、蹄病治療のために削蹄師さん、獣医師を呼ぶ回数が少なくなるので診療コストが低くなります。また、農場のスタッフで対応できるのであれば、跛行発見から治療までが素早く対応できるようになります。

そうした対応を含めて蹄を見る機会が増えれば、その農場ではどんな蹄病がどの時期に多いのか？それはなぜなのか？といったことから、農場のハウコンフォートをもう一度考えるきっかけになると思います。そして農家さんが主体となって蹄病を減らしていくことができると思います。

以前のマネジメント情報にも書きましたが、跛行の牛を見つけて、次の日に削蹄師さんや獣医師に頼んで治療するということが日常になっているのであれば、護蹄管理としてはかなり遅れています。まず予防→自家治療→無理なら専門家を呼ぶという流れを作ることが蹄病コントロールには必要だと思っています。

まず何から始めてみるか

農場で蹄の管理をするときに、熟練の削蹄師さんのように1mm以下の精度で蹄を削って整える必要はないと考えています。まずは蹄を上げてみることから始めてはどうでしょうか。

基本的な削り方は親しい削蹄師さんや獣医師から指導してもらうことが近道だと思います。細かい方法論はここでは割愛しますが、難しいことをする必要はありません。明らかに長い部分を削り、ツチヌキを作るだけでも充分です。

そして、あまり大きな声では言えませんが、DDの治療は難しくありませんよね？治療を見ても簡単そうに見えませんか？削蹄師さんのDD処置の費用はわかりませんが、獣医を呼んだ場合には、DDの治療費を考えると非常にもったいないです！いくつかポイントはありますが、非常に簡単です。ぜひトライしてみてください。そして、徐々に蹄底潰瘍などの処置もできるようになっていけば良いと思っています。トライしてみて跛行の原因がわからないときには削蹄師さんや獣医師を呼べばいいのです。

今回紹介した製品の使い方も蹄の処置の仕方も、もし農家さんが興味あるのであればいつでもお伝え出来ますので、THMSのスタッフに声をかけてください。

YUSUKE IWASAWA



Total Herd Management Service